黄表物かたり

上

特別
へ12
5095
1

おもしろきほの物語四巻伝人乃はしくりたるなり
きゝてある人のいとるとさなる点伝えられきんま
実に師猪乃はたらかられいとわのうたをよすわ
きはしいきてなりのほかのへる事をはれはら
世の実ふらの物ふらまはしのき位すゆよ物ふ
ふもてつけくかきるなるまきりとなん我ハさる
るにしもあめとそのふらわれ家のことをもて
物あかんふ乃くもかくるふこは人ひ

序

12
5095
1

〈2002-155〉

とりわけうへを学ぶたぐひかるうけなるものふいひ
たやさんこするほとふ以外へとにもをちこちち
みあるハ人乃國のかこを書ものこさんへとわ
まへていひつくるなれもいつ乃世のこをたの
れうへとそはけるくとはいひあつまへよろれなん
うう屋うれあゆこはくる人のをさくしうかと
あるものこを抜写えうまかられぬこみもかくも
とろゆめさは志ひとてまさへ考りさを

序

こりたるうかへりてハ志れうはきをと拙志ち
の筋ちハいそまてれはおちくほの天れひと
なり伐ちへめをそりつくとよろんかくて
られてあないみしいなめてうち志まとりされ
乃拙作みを後なる新さかへあこはもの新人なん
あくぬとおほきハまりよこうはくのぬよち
才業ひるよ伐ふてのうわあしおさてれまく
毎の世ふをそひなくはのれよは心さ伐乃

序

二

いのらさまもかくの人はいつるを
さくとかくにつひにあらはるをこ
つ遊のはしとそのしるふふさ身はる
色もなみもまくをとはそくしのと思て
いとかもえんーあーきなくこゆめるも
岩ほのあのれすみのもとめまくひとりふ
まくかうの人をもあはもつらしぬほさぬ
ふはあさめれは男ふ思しあてをりぬま

まををりひきこのへ手ーはの毛はふまよ紀
むくひとをはあ人毛ふもれるとふまこれを
うめーあも思ーー出へきなは男のいみーき
あこうるはしてれふのうりなきたくーー出
はひかりハ女君のはてろはもりてすーと
はるーしはこのるなれへまをかつりてもはし
とのこと思ーとをもまはは父の中絹言屋はまま母
三日の君はれうくのいつるみとひーうない

ふんちをとゝせめてゝなけき給ふ主身も
久しゝかりなる三條の家こゝろのへ〳〵のふてゝたち
をよきむゝひのゝしてたかゝれたる心をなく
さめをのゝ女ぼうこの乃乃のまゝはゝのゝ
ゝをゝたまをゝまてもゝをとゝりをみさかゆへ
ゝゝ浅のゝなんして代の拾〳〵をもくゝる
かゝ給ふたゝ姫るまひなこゝよゝゝ家〳〵と拾
〳〵ゝをみゝるゝをめてゝをまれほんゝをゝちかゝ

又かゝるのゝ物乃なゝのゝよゝるをも大宮
の風毋ゝなゝてゝ男ひゝゝとあなかゝち
に宇ゝ者のゝゝまゝゝ心ゝへゝとハゝゝぬる
ゝもある屋ゝ浅者の拾ゝのゝむをあれ
ゝゝゝなるゝゝゝまゝても人をゝゝ
ゝあゝゝゝゝゝゝゝぬゝまゝのゝゝ
ゝゝ雅へ乃をゝなへゝゝたゝ一時乃ゝ拾ゝ
ゝゝゝゝ拾ゝ乃ゝあゝまゝハ女ゝゝゝゝ見ゝ

ぶまし　きあて人とゝ我いつ角てのりあれ
さるハ竹うたけ二さゝめつてたみさをのさゝく
しきはこのわかえ七夕めれ多とたゝりゝ姫の
いろしさ我もとゝまくて世のほゝ迄ゝ
ゝ多ふちんいとゝまかふこのり寄る人のたゝ掛ゝ
ゝ多ゝ我のたゝのゝ多ち心をゝ人をゝ御ゝ
ゝ多ゝ我ほうけつさゝなゝ吉祥天女我むこの
ゝゝたりとゝやれ男君をゝ御ゝきゝて

ほゝ多ふなるへきけ世男君も君ゝりほゝふ
八秋の野ゝ花ゝに世ゝむゝ御ゝて世心
をれゝとゝ多ふゝゝゝみゝ三移んにをゝめら
ゝて女君のいみゝ多ゝて我ゝ御ゝれをとれ
ゝ多ふゝゝ御ゝ八世二かゝれんをなん河洲の
ゝ多乃御ひゝゝゝ君のたゝくひゝりゝ我
よくゝゝみてよくゝんえハたゝのきたあゝゝりをは
このゝゝて世ゝまゝゝ民まれゝものゝ乃のあゝ

きしちこくまて城へかゝりまゆあふことも
ぬくべうん兄ゆりけるいと源氏の物語世ちゝ
母あ歌にもくゝりのちすくさかゝきハあれとよく
よみてくゝ心えまはむもふうゝてゝ紀ときを
おほうそなんかゝ　ゝ　ゝ　

れち久ぼ物語一之上

いまむかし昔、中納言なる人乃、むすめあまたもちはべるおり
き、大系中の系よりハ聟どりして、西の対、ひんがしの方、花く
とゝて住をまわ殿ふ、三位の系よりも尝系をまりしはべんとて、
かゝるほどに、ものゝふ又時ゝかゝるひとゝふぐるまを家統流腹ゝ
系ゝて、母もなくゝはゝ女おゝ小ゝ方ゝゝろやゝゝのゝ花ゝしけむ、
はゝつふまつるつゝまゝ乃系ゝゝにおぼゝゝず、寝殿の放生の又
一間ゝるゝ、落ゝ殿なるはゝ、二百なるに殿ん住をゝゝまふゝ殿、
系ゝぶゝちゝゝもいゝゝふゝはゝゝゝゝゝゝゝゝ況ていゝゝゝゝゝゝゝゝもあゝゝ
名をつけんとゝゝれば、はゝゝゝゝかゝゝ大殿のゝゝゝゝゝん心ゝゝゝ

しと、懐こそ孫ふてはらちらばの夷といふを告ふてきへば人く
も今云はくども、乳母より福ふくや男しつうそ宋ふくん
海ふてゆの分はは限ふ言ふてけうの者きさるゆ多こうはじ
き人もなく、乳母もなうけ、たゞ母のわたしける時より、
はうひつけふる妻女乃、海原ふるる女ゞうろ元と仕て仕
あふひろふ、麦懐より男ひうけふて、片時もきれずされば此
元は宝儀はかふうしづふ孫ふはむすめなども者ふるまじけ
れど、宝夷らふるもなくてあ海物ふる人なやうく
物男ひきるまくに、世の中はあふれふ、心うたるみみ
男ふれふきばかふくのみゞおなもゞく、

曰ふろへてうきのみ侍る世の中に心づふは家をいうせん
といひていふう物男ひ初ふる侍ふて大うふれんさまはふくて、
琴なども習ハす人あらばいふくきつべふれど海うハ者へん母
宝のいせつばうわにておけしふるに習ハしおい孫ふゞるまよ、
筆は琴をせよふかふく孫ふ日ふれば嬉書後の三郎宝
十はふうなふに筆ふよふうりとて是ふ習ハきとふの方
は孫人ハ時くあふふつくゞと国縁のふくに物めふう
を習ひけきこゞいとをかしげふひまめひ孫日ふれば
ふうあり、楽ふる面貌なふ人ハ物実やうくおひひふるそふ
はとて、二人の聲は和ふ宝ハかなる面なくかふあ

ひ強をつよへハ、きげしてゝ物動しかわしゝ、夜るも寝もね
ぞつゝかおそよ間ハかぢのわけるをゝぞろゝをゝ
にきつゝふ去、伊を蓋にをんとてならんと切めつゝ
ハうち治ていこの後、なゝは消うせめるわゝもかゝなゝゝるけ
く、三の矣ゝ出来させてまつり孫ひて、即歳人のか
わゝり婚せゝてまつり孫ゝていゝはりなゝふるか
きりなし、わちゝほの矣、海ゝていゝと万なゝいゝゝゝ紀
年海ゝるわゝく、壽ゝゝ人ハ、わほゝかやうみ矣
るゆすゝ人やゆなゝりけん、あれゝりやゝゝていゝと使し
ゆ巳ハ、うちなゝゝめゝ、

三

この中に、ゝのゝであらゝゝ巳ゝゝかゝるゝあ物ハ壽身なりけゝ、
うゝろゝと云ハ髮ゝゝをかしけ角れハ、ゝ去ハ矣の寸ゝなゝ
ゝゝよめしゝゝ、ゝ後ゝいゝゝおゝゝゝゝ必ゝと思ひて、矣矣
につゝふまつゝんゝ思ひてゝゝ、秋ゝゝゝ人ゝむゝふ涙ゝも
遅ゝゝゝゝれゝゝゝ思ゝゝ、他矣ゝゝハゝゝゝと泣ハ、矣、
伊ゝの、わ角じゝゝゝ伊んのゝゝりハおれゝゝるゝゝゝん衣な
ゝゝ尼ゝ苦しかりつゝゝ、中ゝ苦ゝゝとなんゝゝゝゝのゝまふ況
に抱ゝゝゝゝゝ歳ゝゝゝれハ、懈きゝ心ゝゝゝゝゝておハす
ゝをゝゝゝ、別ひて、碁心ゝ治しゝれハ、掌に入ゝ居ゝハ、切
なゝむゝゝかゝりなし、ゝ落ゝゝゝゝ矣れ、ゝれをゝゝ、喚

ちめ孫ふるのと、後ぐられてまく、心のぐかる和ぐうも
きまだうく法名と云名使なくして、安濃とつけうまひく、
かく法かとく、義人がれの方法なるに、常力ていとぐ
きてる者、はあと付よ文かくはて、年強て後、美ぐう思ひ
て伝ふ、夏よ強なく和ぐうしける序次よ、はる美よ
ゆくるをかくうて小のくるみは心の妻くうて、哀きくて伝を
きり孫ふるす、きるハはいだくへくかくちはおたしますやう
話るおなくつ、ゆので思ふやうなる人よ倫了をきら
んと、ゆ言痛ものるゆひ思ふはちはるが女祝ハ九
たれとゆ右くるはむすよ、九近がれるてはもしけるをな

ん言ひきり付る、ほど書もおもさでよ男人のむきめれ
ど人すかてらきて四ゆ孫ふるおちはほの秀よ
我うるゆえくれば、お行耳ごほりて、静なる一万う、細
うすかてらきて可憐ゆくる思ふらん、きるハわうどふ
ア思ちなくアかし、家うう楽窓うあハきくとの孫く
ハ今ハ世にもはぼくう半きくはじいまかくれんとものし
はちんゆきハ入きに入るかし、もれきてはく住むきれ
ゆくはゆちはるく、ゆこなるかくなんとくれ表ハ
ゆきをちゆうのるかけても思はるうちにいみぐく
ろごのみゆゆきりしもはをともてはを行て時くふるを、

たちはなく然もれば、ようしゝくはまゝしまくんとて、おの
はるばるとなる扇をこゝろ賣買するハはるゝ〻れば、おもむ
やう弟法所ハ辱しとて、為ゝほ一間をきつらひてなん
卧たる八月つゝちごろまるゞし、夾ひとりふゝて、扇も
祝うれめまくう、母ぎみ、あを迎へくまへいとゝゞし
と云ふゝ、

家う嘉あ、きをかけゞ云てのへり共にを海ゝ、素絲れ
ごなん心和とめうしいとうひなし、居めて、物ごゝのついでに、
うれがかくやハゝゞ、ハゝ仏らん、めしてのゝくハゝゞ、ハゝゞ者きは
てとせ弥ゝんとうゝにいらくもきゞいとゝゞらひて居る

法乃ゝ、三の琴よはきあるとて喚るれば、ゝあ、心地
うちにゝ、九ありとも右ゝ、ゝるゝハゝなんや、め祝
みれゝきあゝ、ちいきひなゝ身とありて、ゝのゝでなんを
思ふ心ほし、ゝゝりなりても、夏の内きれるゝじゝれば、
減ゝうせなんゝゝゞもかゞ形と思ゝ、ゝちはゝ、ゝ形夏う
氣りゝれゞ、ゝうゝでかのゝゝハいひはゞりしかば、ゝく
なんゝ中ゝ、はゝゝふゝにいゝ香ゝきゝり、かゆゝうのゝちゞハ、祝
ある人ゝりゝゝとゝもかくも勤げ、ゝゝくゝも心のゝゝる雨
絃られてゝよもゝゝ海ゝじとのへばゝれゝゝゝ、みれこ
入ゝゝゝん云へ、聳ゞゝゝもいゝはしゝるゝゝゝちを

ゑし、猫ゝう程思えるまで、ちらこむうへてん、ちらまでば、行
雷雲ゝてもやこなんかゝとのゝちゝうへば、其程はれは云めゝ
ゝ承りてなんはちうふまつるべゝれりとやきば、ゆれ、見てゝそ
言むべうゝるれ、時ゝゝは伊うでかゝ、思やゝう程ゝゆでゝれ、
世ゝうふゝいゝ言まゝでゝのゝちゝうへば、ゆちはゝ、風ゝゝゝあゝ紀雷
ゝ文字なゝりゝゝせば、表お矣ひ野ゝて、ゝゝゝといはんゝし
ゝゝゝをいゝゝゝゝゝられゝゝゝゝやなゝゝうちわゝゝひ野ゝて、ゝゝ
をゝて、はゝゝゝゝゝまで、ゝゝゝゝゝゝとゝて、あゝゝゝはふゝゝて
引ゝゝゝれば、ゝゝゝ雷ゝゝゝ海ゝゝ行ゝゝにゝゝふゝゝゝないゝゝはゆ
えゝゝとゝゝゝで、程はゝゝゝゝゝゝ

てれたるまゝなりハよからん、あかがるも、男ふやうにて
といへど、ゐなかゆや、はしこのうちもしげくおぼをハなどゐはも
ゆるゝ、はとめて、はるゝ、ゐるゝれたるゝ、れたるゝぼをは
しはらくして、ゑ形へハ、形ゐいとけうくて、はれごゝ愛ゐい
とうつくしげくて、かゝりて居るを、可憐とやゐるゝ
けん、ゐるりはとあしはるゝれとゐてきれど、えやん
ごとなきゐおのるをもるゝ、ゐるほどゝ、えはるゝ
かるべきゐあらハ、はゝ知し給へ、うくてはこいゐ法が産にし
やとのゝ、ふゝけづかしうて、知もやゝれもゝかへり給て
ふはゐゐ、ゐるゝぼをはしのゝ紀ゐつをハはゝゐ

ゐるゝ、ゐけゐるゐ、ゐるゝ袴ひゝをゝゐ居て居るゐれ、子
どもはゐぎめやゐる、ゐるをゝ、居るいゝゝもゝん
ゆるのゝゝへもゝ、はのゝゝ、ゐゝゝ、ゐゝせをれど、はゝゐし
給ふゐや、厩はゐゐもえゝ、ゐゝゝゐへとゝ給へハ、ゐ角
ゐゝてのゝるゐや、祝ゐ、迎ゝ、浮ゝゝ、心もゝかゝゝゝゝで
あゝんゐゝゐゝゐゝ給ふ、聟のゐれ、ゐの表は袴めゝを
におゝを給ゝゝゝれハはゝゐもゝくめゝれゝふ、綿ふ
衣ゐゝをゝゝんとのゝゝゝへゝゝゝゝ、蝙ゝゝるゐかゐゐ
なゝいゝゝ、ゝゝゝ、清はゝめゝひゝゝゝへゝハはゝゐゝゝゝ
男ゝゝゝ、ゐが、ゐゝゝる陵のゝゝり締のゝ、蔓ゝるを、ゐゝを

あるへば風いたくはやくなる時に、いのうせまして田
ふるひ、はたしうれふ〳〵田をあるぐ、さてちせ屋しるとてる
や、氏紀耳の美ハあるとるものをも嘆ぐましくいひよてこ
とをバ摺屋うり笑ふる心性なれバ、せうぶくどもいと
うしよくあひをふをうりとほむれバ、るぐちふのうに
ヤをバあるうほ、わちらぼの美うゆ屋面心ねぐりせん
ものぐ、かやうに若い屋をはきてわるぐるぐ、うれをは
いそひて、人うも用ひられんもあぐとのうへバるだ
ちいと嬉ぐ、ぐるものうよの面、あうら美をと、見ぐて
いふもあうし、かるてかるいひるあ弱ふてぐれバ、文はた文、

ぐうりはしてあり
はちるていふうひらバ花ず紀、うるも風ふおなぐびか
なん、はるりなし、ぐれいるうもるる、
はもやまりしほぐうハ知田しるぐりけるとて、
雲乃なるぐ時面ハ人意る心ようちもかるるしけり、
はうくりもなし、又
天河雲ハうけるていふるバうわるしぐ、
けくにあらものとぐ弱ぐいひるうり弱へど、弱てはるりなしいる
みぐう知でやしきうるとかやうれ文もきぐ元しらぐり
けるバ、伊ぐうりふるもるるやあうん、知田ひるりぐ

ろゆをなどゝいはかるゝかへりるをゞにたゝてなゝ
と、だちかゝりのゝまへ者、きらぞい小のゝゝよいみゞゝ心
のあゝていゑゆゝとげらんてす、雪降ゝてもゐ出ばいみゞじか
らんとゝ成られ雪ひゝゝ、忍逢ゝゝゝくゝるゝとれんや仕る
とゝやをばゝゑゝを密ゝゝといひゝゝり形へばゝゝの実れ時云
を、雪びゞゝゝやゝけんいゝでと元ありゝく十日ゞゝり
きづれゝみゝはで、思ひ出てのゝゝり、

はゞろゝい

かゝゝゝゝてやみやきゝ浦し、ゝゝ仕のゝいゝゞゞまる田の、池
の水ゞゝ、思ゝゝきゝ思ゝびつきゞゞ仕てもえあるきじ

かりゝれば人ゝきゝで人ゝろゝ　とあればゝちはゝ、仕度
ゞにゝのへりやゝゝきゝ、きのゝゝきんのゝきひてゝゝいれ
めゞゞとゝいなむゝとりゝへ者ゝゝと仕又いゝゝんやゝもえゝゞ、
形象　とていゝとゝゝげゝ思ほゝゝるものゝとゝて氣りて、尺をれ
ど、中の悪ゝゝをゝとゝゝ出客中毎、形ゝりてゞゝきゝふゝへの
きめめひゝきゝふほゞゝゝて仕ゝ通りなしゝゞれゞゞものひきゝ
めゝやあゝんと思ゝゝど、いゝんふ形ゝのゝゝ仕んもやゝみゝゝれ
ばゝるゝゝろゞゝへやお意ゝゝけん、あゝいゝゝと元紙とせ
めゝきゝゝど、ゝのゝゝゞ仕ゝゝきゝていゝゝゝさわゞゞきゝほど
まればゝるゞゝをりもなゝて、思ゝへありゝゝやどゝゝ仕度、

ふるさとは孫たちに石山うきうで孫ふく法住寺殿
たひやゆるまに將ておもすれば孫まとへそぼらんす
を、孫と思ひて涙うづる法師こそ人界よりにぶ
も入ざれば母はちのふ、おちぞの夏おとおいをひとりは
孫ちんの病わ〳〵まるとや孫へ者ちてうれがいつありた
きて教、樣ていめひ物やあらんとそる、花ありのせうめど、
内ト義ておきうんぶ〳〵とて、思ひうけでやきふふい
め、ゆと伏ハ三の君はは方人ていとれなくけうぶかきて、
おてれたるうう、れのゝ者のたぶひとりおきるるいいじ
く思ひてうきかう用ゆらめとやてうれば世ともあ

らば、かの君ぞの君はひとりれたるを思ひてつるめ
ると、後ぶてばいとわりなしはちむらへと
ひらバ案うんかく可興るすでも思ふ人のなんや、とんる
だう者ひゆくそうあえれといへばげうとや
思ひんん婢ぞうはのみに若ぞうをてとぶめ孫ひのゝ者
りてをるもひめきばかい住て心がうぞなれど、あ者と
おかうひおるほどう、たちハたちハとでの降より、
はとも比案りなもたぶどやハはとうとうばを案うん
といひうれば、
はかうのなゆしぞおうれたそしてうはうを孫日めれば、

行ふの志ゆゑん、いとてれぐ者をなんなぐさめつゝ
くばりそせ、ありゆゝしのてまひし孫かれらもでもておいを、
とのひいろい安時、あはれ世にこういみぐ〻多くさ
むらふべくれ美れそしかつゝそで尺てゝひてん
といへ法なりけるめちゝ郎はみを、がわの美うん
きをきばられや性成が書めをいてうこうさたれ、ゝ
をりこゝてゝけきいてゝたゝぐうれとゝゝか孫一
まれれそし孫そうんとゆせば、美かのいひんやう面
らんをりさう尺をめとゝみきゝへばさも作りめべゝ
をりこゝてゝ作めれとゝゝか、お笑ひ孫ふてはうゝれ

はゝて志法ゝ名孫ゝ、こゆびきゝて、いきばめゝる畜
をかゝゝきゝて、めし作れば、白の海ゝ
作れなゝをうゝふ里へるゝ人、そゝし、白ん せぐふゝう
田ひぐほなれをゝれとゝ出ゝてゝ、ばゝ茅づとて、秋ゝ
をゝうれさまもうん果子、一餌代ゝて置ゝてゝ、ばゝ
いはゝで今とりにをらんゝをゝおゝて作めあゝ花咲をれ
ばゝでゝこうりかといへ志、茅志ゝ志、作は文尺ををり孫へいで、美
ゝゝゝゝゝあら先といへぐいとりていめ、志いとつれぐゝる
をりにて尺ゝまへば、孫や作ゝ右つるとのゝてまへばだちいゝ
ぐ許ゝ志ゝのゝいひつゝを、作焼じつけゝるにゝべゝるあゝそ

ゝへ、ぎうこうて、心なしとそもうられまるやうにこそ、人ゝ考ら
きぬ人ふせんつまるこそうふれとて、物しこまこれも分
ゝこそ、なちふこが嗜べバ、陸め、物ぐるして、陸くこの山り
ゝ考へこと、ちり家なくてあまこ同、泊瀬ゝこと寄ぐし
や、姫ども乃法許ふこぶ物とりこやらんとて、行もあらん
物こゝうくとりひくやりこれバ、ちぶくろ二つしてなてつこ
まゝにしてこゝろ、こゝもとこの大きやのなるにハ、さまぐ
おこぶ物、ゑこ乃鰐、うこ紀濃こ入て、弘陽て、境栄入て
ちこにてゑぐあゝこ、ひこぶこ紀につこなれバ、様こてき
へいのこ考こゝふらん、ぎぐうこ、ぴやいごあハ、ゑ語とりふらん

人ゝ物しぎくといへり、ちくふぐしげゝる毛ゝこと考て、
ゝの信、おこの物こゝゆぐし残考ん毛と思ひて考こるなりけを、
女考ていであゆし、まめこぶ物や、毛しうこぞ、こに考こ
まくこゝこゝこゝこゝんぎれバ、学力おこゝひて、ゝこそ、ゝ
ゑこゝやうに考ぐこしげこゝ考てんや、ゝこれどもの法さか
しこゝ毛めり、毛ゝ、れ考こゝてこゝてやりつ、二人ふこて、
こゝこに考の法いぐくどもをこゝ法、ゝこひるふまバ、ゝも
ゝハをぐこて、こゝこゆこて弘ゝり、女考、人なこをりて弘
いこゝをかこゝうなつこゝこゝ弘ふしこゝこゝ、ゝめちこゝ、ゝこ
とゆて、こゝ法こぐ考こゝ乃へるハといへぎ、ゝちぐし、ゝよの六

紐うおいをしはけうり、おく〳〵行へるゞとゝふ間て、かわい
とゝよびておそ〳〵にたうふ人をいれてまひて、ゆゆべさる
ありてなんゑもちはゝをゑ行へとゝ云はきバ、常カうゝろにて、
おつしこゝろと思ひて、あたゞ〳〵て、只今寄めんさとて、
ゑていめれ者、あとゞおまへうり糸りめ、ゞわいうみうゝ海
面うり来る銭いゝづうかへ次面とゆゝまへバ、ゑもちはゝ、
光法消息を編うらで、さ百なゝてもおけしましにゝろゝの
な、人のゆゝうゝも者うゞ、いゝ雅ゝてるゝ作ゝとやせバ、
ゞわいゝゝ〳〵面ゞちでゝて、ゝ〳〵歌ゝまへバ、常はさバを
下りゝせ所へゝて、諸せゝうゝみまふ次車ハまゞゝゝゝ

本ゝて、うへしやりつ、糸書団のやりたはうゝ者ばし居てゝ
面てゝるゆゆ人ゞゝれ、ゝるをりなれバんゆそゝゝてまゞ
かいゝゝえをせゝをゝゝのゝゝへバ者ゞし心ゝたゝゝもゞせ法
をゝゝゝはん物系の姫天ゝゝみゆうなゝゝゝゝゆれハ笠も所
あへで、袖をゝゝづゝてかへるばゝゝと矣ひゝまふ格ゝれ碧間
に入まりて留ゝれ作面人やえつゝほゝ、だのれもゝばし
・簀子ゝ居る、天の天ゝまへバ消えめぐゝ次ゝもしゝれ
帳屏風ゞゝゝけきバゝゝ天ゆ、むゝひゝるハあゝゞゝめ
天ゝ天ゆる、実能ゝひつゝをゝしゞてしゝゝ衣ゝへに
法やゝゝれるかいわりの祖笑ゝりゝひふしゝる人あり、

実なるべし、さてさきあのりをへてるとゝゆるを見て、い
ねりのそり綿をるべし、櫛とりて引うゝゆて、側うてあ
きバ、面ハうゝをもてかゝらつゝ蚊のゝうゝをいゝとをうしげな
りと見るほどゝり、決きたちあ、うちをゝとれもほゝくれど、遥
けてと思しなに、あれ嘲のうどや、人ありとゝひてるをばやゝ
ゝ云ありもいゝ笑ゝくひてちうなり、人ゝりうひにきうり
めるうちに、はゝまへり仕ゝらうん、大かゝり人なけきバ、おゝゝく
おそしてはんゝをゝゝとゝく表、狩やゝれろ絡しをハ用な
きゝれゝゝと云表をゝゝきバゝゝうゝ、はゝ送りてのふまつ
るゝゝ、はゝ笑ハゝゝをいゝバゝゝを思ハバゝゝかゝゝゝ笑ひ

所ふ心のうちにて表衣どもゝゝなゝゝゝ、所ゝゝと思ゝん
ものゝゝとれもゝ思しゝれゝど、ばやゝゝ人ゝをもて寝ゝものゝ
はゝゝバ青田ゝりゝゝゝゝゝゝ、ゝゝゝひハおゝゝゝゝ
らふゝゝゝゝむらひゝゝゝれおゝゝゝゝ若ゝ今人のゝひ
ゝゝゝゝゝゝ

なぐらはさぐりて、
さべて世のうくれる時は、身がくくん、岩ほの中に住ま
ゐあてとりひて、ここに藤入やじけまバ、又人まなうつと
思ひて、格子を木れけ、ていくこうけ出ちて、わくゐて、へ
めくり、いとわろ侍くて、きあぐるほどうち、ふとりてと
らく、ふあこだかうし城ぬらるく、さをやていつれうんとれ
とくくさどひて、契れバ、ゐもちけきさらにおくきそで、さハ侍
ぐ、はかうしみぬつるとなぐぬくそんとりへ、ぐ犬なくん、わ者で
みるらんぐ、なおどくく、ゐわそといへそで、きでふるすそで、きてる
やうぬあれバ、ゐうとりく、ぐ、何ぐかをん、藤なんと、拾きて

ふくくれ、ぐ、ぬ者わびしあ者うくとぬほくくて、後ぐて
どうぐくもせ尻、いぐくくさあられてかひもなしかね、そらへ
なぐらはうぐくそれてふくくまひあ、女、たろ侍くうわびし
くて、わるくくゐ、て法ぬ、ぬあいとんうくたぼくくるり、世
ぬ中のあそれるるるもゆくん、ぐほの中もあてたて
まつうんとくくろぬのくはくぐ、ぐ、ぐ者なくうんと思ふうも、きあ
ぐも、ぬいとわぐくう、待のいくくろひぐくるをれもふろ、
ぬくくもあるくのくもぐぬくくなくくぬいと侍みぐぬ者
るくまくくれきバくぐらハくくわぐぬたて、紙もいくくで、卦
ゐり、ぬ古侍ぐふくくるる而もちかくれバ法くくまふ夢

もはのかうやゆれバされバ思ひてまどひたくる
をそ、ゆくれくさをのバ、糸更をいろ〳〵きれしをり
てかくハちるぞやあやしきて思ひついくあひぎゆう
なしうりけるいもこをけるをもとの面として、猪ぐちの れ
そりておくれバいみちはとく笑ふるすがうきら
めくもたぐれくをうゆ賀をてくまふてくうらめうく
にみ時めき人入んやきい、男ぐくうれハくあ、今ハ
糸り野ふてもかひあらじ、ぐいく表ぐで、行つきなく紙
なりひろたきとぶにりく、いとそぐとおぐぶう面いうく
れもはしまぐふらんとてなる事バ河路きうまやと笑

ふ姫くくるうひて、相おがさぐりけるくうえくくるすと、
いとはらくと思ひうれバ心ぐるうて、はくとうおれよ
美なん知のくきはんとてれくそしうつるをいうる面らん
るるるらんひなうきとてもかくくても、はぐ宿せぐあらんくふ
きいくくく

のこりなくぎりしに、位なきものとえて、やえでもいらばや
と思ひしうとも、世にいろめきありて後いとあはきうわばた
ぶひしうを、かう悔まれきるぐらく世のみこもけりと思
ひくらるれば、うきもらのうきもそのみなんとかしくぐもりて
ふしうをくきばかあぐめくちまつふ学衣はなくは
かりひとつまりて、ばくあらばうり身につくるを思ひて、
ものとそでとはれろのなり、涙よりも汗こそなりをを
こ者も其こまくれをふとえ死ひて、痛ほしうひもわく
れとはまよろづれはくみちまくどいらくみこべくも思
ものぶばづうくきり、ひとぶ歌をとつてうと思ふからう

よりて明くまれり、手出明きぬれば男女、
乗ぶかく泣明すぶに出くくるいとうくあしき名ぶと泣歌、
いとく時ハきくまくハ輝やきぶハ世づうめちちす
面ぶとのくまくハうらぶて省くもあらぶいらふ
人ぶろうくこハうくたぐべてなくくちかぶ色ハやちぶ
とふきういと鶯こうれぶおれの実、まはぶりに思きを、
実やうに思ひ所ふぶしハ車かてふりくをとこうをぶやてた
ちくふあくぶろう、案りてナ所くていをぶ枝べハまわら
ぶて行万わくんぶりまくろぶ行りくるものとこうを思をめ、
行ぶぶれくハくうくとせをまらハくるとぶ然ぶ泣、ハ

まけなくよもみちのくにをかしくれば、おそくひて、夜読を聞く。
ばかりの男けんうかいひて、格子のけぶきにうりて、あるじづ
くれば、かれ起てまふ、女、きぬめを引きをかつぎ、ひとく
もなくていと清くうるはしければ、ひとくを挑るておくをとりまふ女
いとあはつかなる程なり、いとをしければ、あひちかいとねしくれど、
けてもいらいかくるまば、糸りてえるて、清ぐふいさきくらいに
かで云をんと思ふほどうち、ゐちけるものも、実ぬもあり、たち
をくみうをい、
後ひとくまくらめるにわ、おひとをひとりてそいとくれり
をかりつれ、けみをおうてもを練なくん時云をくらじ、さいて

伊勢ものがたり

かれおまへにもいくうに、くくもあらけりく彩をのうをと、
おぼしのくまハすらんとおくをふたをふ社ハけみをくべる免
る、内返りやをいて、世の中ハけるべきくやなくか田
ほす　とくらもて糸りて、ちくにけ文伝彩めり、枝べ右
いくくを実くく田ひうををでくしてふしけりくしほどふはくをけ
けりくをめ、やくをけすとも、けらぶをとぶけをくをせ彩をけら
んとおくをくるハくをわらなれど、ぬくれをぐうくをて伝ば
とくくをぐ扶云ひをくれど、いくくもせをぐ、けくよもあをかた
をくをハ狩をりて伝くとけもほをくくを伝くめれぶうく

許多は年来はうつまつり侍りて、かくう〜侍めづらしく
ハ思はりなんやひとわおもそ〜アはけんを思ふ所へてきそし
きは侍りしも年り侍らで成うひなく、かるこれわを
ゆき所をぶかひなくこけ〜なるらばさむらうんもいとく
はけうはりいづちもく退らなんとて、おなじくハ天いとく
思ふてうらに初らんとも思をぶいとあはづまう思い
もかりぬるなれバいとんう〜思ふらにいと高つけるる
袴はみをさうアはて天ぬるうろいといはんうつなくしば
りれ、古上おいきましのぞ侍るすこつ袴でも、かくうき
めえましかハとていみじう泣うまへバぶぐこうわうに侍きぞ、

ゆみづ〜縄母うくぶゆの方はみいのかうぶうひぶきしま
ゆうふさたぐもゆき所くまハはこうそ思にらあたぐはうく
ろぐう彩をまりめぐ〜ハ侍うこうれしうんろれこう
まして、かく美やうさうん人くをそそ心ともりて思ふ人ハ者
なんや、物のゆうあうぶのうくゆうこのうまはんあいそぐら
ん人はうるをぶにまうらバ古うにもれいうこぶよのうまうし
えのをというこうと思ひ所つまハはれぶ中〜思ひはまれ
まりうこんぐうからうん、うくていもまわうしアはハつれ
世うり家〜もなうせうはんかうて〜世うおはうま
さじかうて義屋まり所るてうひを所うんの心いうう

そてあらせやたれかいとうとおもやといとおもれ〳〵うゑ居るゝ
ゆのへりるすいと四へ表ゝうはゆうはゆもはゆんぎゝそいれ
げゝるゞゝもからひあらゞとてはゝみ拝ぶゆてきれいう
つゞしなゝのうゝるゝまゝくいゝみゞかゝのゝるゞあゆ
いのれきや、ゆる四ゝしなゞゝりハ今ゝるゆ四ゞふゝるまゝるハ
とゝゝけれとゝゝゝゝちゝうしとゝてゝはゝゝるゝりゝるゝゝ、あゝゝゞか
るゝゝ云かゝ、

いでや、ゝゞゝれゝゝゝそゝゝゝゝゞゝ、拝べの心ハゝゞゝりなゝゝあれ
なゝゝ、ゝゝゝゝゞれゝゝゝゝ、後ぎたなゝゝゝゝてゝしゝゞハそゆ
ゝゝゝれもゝゝゝれゝまゝゝゝゝんれまゝに云ゝゝゝ

やましげゝてゝゝゞゝゝおゝゝゝゝゝれゝゝれゝもゝちなゝゞゝ
なんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれゝ
といゝゝ、ゝれゝのゝゝゝかゝなんゝゝゝれゝゝれゝゝれゝ
ハゝかれきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゞゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゞゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きにゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝみをろいをさげるゝんそまりのてまいをか
といつり、ほうぐ紙、ちくみいといつぶぐ、いつに思ひをてまふらんやと
思ふそ、をづかしうはをゝまをそうわびゝていうるりるをべ
くもおぼえるばかりで衣を引ゝづをてふしふりやえわ
づらひてあと使かへりるす出、
はるみは見じつれど寒やるる若しげるるみたゝまに
てなんは系へわゝをも、はてていると出をまをいなどのいつみ
ほどゝうハみじのをもそそんいんまぶゝもし家なくも
うゝ源やすくのてまふらん　とおてやりつ、
たちいきそをまりゝればいみぶゝけまて、物ゝいへるも

のゝれ、をゝまをに孤うゝ思ひをうるこゝをのゝうゝん
とほゝちるみてのゝまふはてあゝ紙ゝで一人していひ今す
ぶをゝ人もなをればんひとゝをみぐになをてゝ居ゝて、わを
一位の望はゝひをゝぶゝて屏風几帳をゝれば老ゝをゝひを
んをゝもなゝいをれゝるをけれど、寒ハ物もわぶ、えでふしゝを
へゝをとおをしなんはをんとゝ引をとしをを出ゝ面あゝみてげ
に苦ゝげゝるまで、はは月もはをれ紙ゝいをほゝうあをれ
ゝてみぐしかをゝぶゝ孤へとゝわを面ゝはをゝろへぶゝをゝち
はゝとをゝるぐ卧ゝるゝぬはは寒いはをゝかをゝをは調ゝ度も
ををへゝりはる、毎夕はは物なりはをを綾なんをいめやゝり

うつくしげなりけるを、ものへらでもしのびと
いひて、かくぬぐひて、枕よりはなれ、かくおとるになりぬ、
す、ひとり勤めてくちすさびたいしあらんとて、かくし
けることもまぐれてうつの身にもなれたらぬいとほうしく、
をぐらいたてて左右をたのり所をんとて、己が待ちゆくびだか
ぎ見ていと清げなる、あこめ姿ひとつをもちけるをいとしみ
びてなるとて、伴とかれてうつたれど、まぐれて考る人みたら
いろうあらえいろうばせんとしけきぶつ
ひさくれ者じやうにて左右をんるをかぶりなく思ひつるう、
ひそれて見るもひつ、紙ハ、古れ紙ハ、

ものを、夢はうつつみおそてたりとそいとかうぞしうた
きくけそ寸、三尺のはんぬ帳ひとつ書入るあ添ぬうぐせん、
絵ものから清しけとよい紙もそなるを、思ひやはして、嬉
の変後をつくしけるがくハれるのるみ書にてゐるう
ける伴ものみ歩る
とみ者法ものそうめたりぬ、砂のうち人の、方書へう、
書図りもれ所ぐるに、凡帳ひとつ、はてハよい紙
う人のもも、伝るるハえいるし、たらぐと思ひたりてあ
んばるべるや作る所ををて人やおらぬくハけやしる
るなきど、とみそなん　とけしまかそてやうれば、

そもの迷ふす
おとづれてまもなくあさましう思ひよれば行もの
おのづからけんとのこころへわれおもふてこそあやし
けきてど、おのづから心とてきりつくれりけそしも猶
しかるべうんれちゆうたてきつる　とて、紫苑をよ
りもり給まで行こせてりいとうれしきものかぶりなし、百
ものてをきる九性の紙とりおろすほどうり、実おほく
きバ、文きりつ、女ふうこうはがうたて田ゆれば、おとうれおも
うはしうおぼし給うんに、何れおとうせ給ふてふ
給らめとて、ハ袴もいとうばし、衣もひとへもあれおも
例の人ぐちきてまひて男もて法しうるでふし給らめ、

おうひそ時ゆかうへきこ戸ふ世うなくみて法ぐうおうおぼ
給らて、ちうでかうひてまふほぐ、板も吹めは車まて
ちりうるとうをバそ面ゆめて、きばしまてとてふて給へ
バあと花、ゆめの、粥いうで、ちうんと思ひて、内厨目うやうう
ちまもしと田へゆい大かうもおけしまちはバはうゆも世う
せでとおりてどいうてうてうふたちけうみ女ちなん、板ぐ
物いちんとて来うしを、面うとはりてやぐ帰うめうう、
うゆうけをんとおもゆ花なんもくて、出家おし給へはてハ
麝ぼしうとや給りてうふ、ひしたまへやうの色おあれいと
けし、心いろうぶ花かう考てまふがいうゆうさかへうせ給

けん料うりをかしたうんとらく、おの面りの孔をんろ、ハ、
けをし高とをぐきてゆはんかの分わかりて〜紀ゆゆ〜
えて、かうはらを体額ふをあけて、ぐとりてゆゆとかし
ハけをしたまくとのくおけちまぐといひて孔ろうとりふて、
角りにいあてゆうくしてもてゆうて、露ろうけゆゆ
いゆゆゆくしてもてゆうて、きゆうけ面る体童もとめけ
りくけてゆづ来ゆんゆとめけりけどけゆゆてハけづく
乃匹盥ゆあゆんゆ、ハけけゆゆのとゆもて来てけまくゆ系
ゆんゆてけけゆけゆけゆゆ〜なぐ〜て居ゆ、女系、わりなく苦し
ゆれもけてゆ孔くり、あゆけと体ぐゆ体粒ゆて第

ゆけゆうかゆうけて来る、背面、毎なけゆゆと戻ばりあ、
ゆりていゆゆをかゆゆゆなりゆゆ、ゆゆりけゆゆも戻ゆる、ゆけ体
かゆゆしハまゆゆでやけゆんを体ゆ、ひとり会して来る
をゆ孔の美もいゆゆうていゆ時、あ事ゆゆのゆゆ
なりて孔ゆゆくハ孔ふみてゆて、よつ、男美れゆて孔体
けゆうぐ〜ゆゆゆて車ハのゆゆと問ゆゆくハけ門ゆけ
ゆとゆを、ハをゆけゆひゆんとそるけいとゆゆけゆけのゆ
彩ゆけわけゆあゆとりがゆて来りゆゆあゆ、ゆうけ体
ハ、ハ、ゆしけぐゆりいとれけぼす、ゆんゆ美ゆ、いゆゆやゆうハう
でと男ひ孔ゆくり、面ゆしゆゆゆゆゆなれハ人ゆゆゆがゆうけ

ちゝはゝ徐々にそゝまこしなんと寸、女ぎみはけうとをそゝまく
はゝきめやうにいと美しゝ髪なれば俳諧かゝりなく和も
ゆゝ万けりていとゝ情愛と思ひ給ふ歌かゆなどかし来
りてふゝゝまこしめ、板さらハこゝるの松かれば居るはけるう
せんこゝひ餅いうで来るわざもうれとれもうり、みらぐ
きゝこもなければらづみあくみゝく
いとゝ行ゝゝう、やたけをなりし角と形ちゝせうりゝなん
悔びやたさけるふみあやしとそ松ばさるべられどゝ
ひもちひなんいとあやしうけまゝそゝうけるふとりがさ
べゝゝうび知ものくゝぐいたりゝ方はゝうゝぐゝん

ちばゝゝ思ひけりゝを、ゆ千ゐるけりなゝなんけり
けるければ此物ども此ばし仕るべゝを、いゝゝ、たらひ
たばうのきゝうげ者らんをしぼたゝるみまけらんとりあ
つめていとゝこけらゝけきどたのみやたさけるまゝう
とて、やりつゝ将のけるとゝうりかるべい方、
よけゝてもゆ家を場ゝ見ゝつ形彩とハいゝでなゝまし
とあれば、けふは及ゝし、
弓をちあ、彩とゝたてハ寸続むかまくうゝるのゝ歩ゝ、
いとゝゝゝげゝ出ゝればいゝゝをゝゝゝ見ゝ形へゝるまし和も
ゆゝしのゝゝはなり、あゝゝが作ゝハいゝでゝみゝ歩ゝり

若はの人のはりはいとあちこれを思ひやりて、さん毛を
もはらもとばむはめくゝ孫をまらうん、方一つハいとやはらかゝ
かゝづゝて、まゝはまらんと思ひて、ぐゝもはゝ正へこれど
も、わゝり孫をめゝろゝをみやゆれ、はどもいとゝかも、
ほゝうゝもゝつゝひゝくゝならひはんざうをまるゝ毛桑やう、
宮づゝくゝさ法人いのゆうの畑必もゝるハなゝうがゝさまでそ
なのゝはばりつゝる身になゝゝゝゝいとみゝ法しゝをいとゝあゆし
わゝゝ、まらん、もちひハはゝゝゝやはゝゝゝ、いまゝゝ今ゝて、
まらん、畑の昊、もちひなどめはゝゝはむゝどり去ゝひ
て、三日はゆうけゝゝゝゆゝゝゝいゝでゝゝいめん日

ゞれいゝゝゝゝ

ゆみ〳〵る雨ふれるかぢりなし、もちひやはざらんと思ふ
ほど〳〵男、竹葉ばかりせて、朴の樋ばかりたらきて、うれ〳〵
る物ありわれぞ、それ、いつの月にきるにのあらん、まもち
ひ二枝、ちひさやうをかしうて、さ露ぐなり、みうい、
にさうのつまへりつれば、いろ〳〵紅て、田ふちにやあら
ざらんさうげ〳〵ちをし、とらへり、雨にうふることて
急げば、汚ぎのりの月かへり云ハ、はべりて、ゆ右さはれ
バ世のつゆなりふ、ゆゆ、ゆゆ、ゆゆ

ゐれば、いみじう物をしと思ひて、ゐちはてゝがるりうとに、
いでや、ゐるとものゐらひつゝ、ゐることもあるをいとゞ（いとゞ）しく物心
ぢうしてあるべれ、さらにやゐちはてゝよにもあらずば
みづからそゆみゐちのうちにおろんとぞうみゐぞ、
ゐゐあやゐちきいで、かゐ法やうのゐや、ちても世の人は、
ゐゐひゐぐらんよ　とかけを夫のゐりるゐはだ、
をゐふを基多田ゐ系猶ゐめれちゐめゐる私ひの面ゐれ
とあり、もてゐりゐるほゐ成ち時もるめゐ（ゐ）の下にて夫
ゐりて、夫もいとうゐれとおもほしゐりゐちはゐがもと
なるゐを夫ひて、伊みゐうゐれりゐるはぎにゐひ

ぎゐるゐ物なりけるを、物のはゐめゐ、物あゐう思ふゐんい
とゐゐけし、西はいやゐちりゐまゐれば思ひ使て新杖（ゐゐ）を
つゐて、きばし侍わゐまゐ（ゐり）、ゐを（ゐ）はゐゐなゐと思ゐう、
あなげゐて立てばかゐる、きばゐ屋ゐれゐのにゐや、いゐやせ
んとゐは（ゐ）ゐうちゐりはゐうやゐていひまゐはあ侍らんとゐをば、
ちゐば我もゆゐんのゐまゐ（ゐ）と思ひていとゐう侍る
なりゐをやをば鑿（かなづち）ひとりはゐう侍ゐ衣めゐゐてゐんとて入ゐ
まひめ、ちちはゐ、かゐもゐめにありゐ、まゐ侍、ゐゐゐゐ孫ゐ
もゐゐ侍、いとゐみゐゐとなゐぞゐゐ、かゐ法まゐに、ゐひぎやゐうゐれ
西やと孫ゐゐて侍ば、夫ゐゐかゐれど、などゐかゐゐて云ゐとの孫ゐ

ば、おがみうつれのし、時ときくも仕まつれとく、おふり
ぐはゆきれると、思びやるいまれて、ゆがみ四ふらんとけづか
うて、うひぬしまへり、男共ハ、あで、おろゝゆゑ衣一うちねを
笑ゝひて、いとかる下ぎまを引つきて、たちふとたぐ二人、如
ひて、大がをを二人ばかりて、門をみろかりゆきせるるていゆ
おもびやうゝをゝはひぬ、ばくやみて、おらふくいそこのあ
しをとをゝろぼひれをるやどり、箭おひて、あまゝ火と
そばをてゝ、ゝ、ばりに、さてりばあひぬいと捷さゝ、ゝ
きば、そあゆゝかれぞ、所側ゝて、かゝを乗かけてゆけ
ば、強名ゝ、おれ追る者ども、おぼしうゝりとゝれかゝ

雨もうに、板まかうたぐふろりゆく、ハまゝ紀角、捕へゝを
いゝ、おゝゆゝて、おぼしばゆみとまりて、ゝれば火とあ
ふりて、人ゝ、見ども、いとゝ、しゆ、人にハあらぬあり
いゝ、おゝ喜人ゝ小盗人ハ、見ゝゝろゝゝ仕ゝめといゝるる
ゝ、かゝゝゝるハなゝ、産仕れゝゝ、かを找ゝうゝとうて
ば、屋のいゝゝ見うゝ仕上ゝ屋ゝ屋ゝりかあまゝおまゝりゝ人、
おゝて、ゝかゝ線ゝ、かゝゝて、彩をゝゝく、決ハまゝゝとて、ば
ゝ、ゝ、ゝ、

れはしめきバ、おとてい汚つれ物の、れはそる面めり、家を蝙蝠
の者と思ひて、とうふるまれ、れもひてるにちうあるうれ、
家を見しろるめす人とつけうつ陰うそをかしうは
きなるぐたぐ二人うるひて笑ひ、あれこまりかく
りちん屋つるいと奥くてはるバ、中ことれもん
とよるへ若男力多ふいう陰雨かくておいしきえる
らぐはるるぐを田ちん人い蒔うう秋くもかぐ面し
まりてん、厳いと寒く歩ちりめゆくはきいるちし、
れおはるまなんとりく若かばうゆぐしふうるはうり
て下りそているぐうにやもはんと思ておいしめ門かうじ

て吸ようをていうるまひめ、ふちハれぐ書国にて、先あるて、
はるる汚るるる又、男力も洗ひて、うるうるい辺くおさ、
まぐ嗜うんにうるんとはりて者べるにもはうるぐいと
美樹面るはあなるぐしとよるまひて、格子見びやうう
叩いれふ女美ちるひらめをつられて田ふにるあらで、大
うるやうちるぐいうにかるるうるこのう陰ちん世れ中のすべて
うるるる、田ひみぐれておなるるふしれうはうるぐ田ひ
はうはるるかひなるぐうり田ひて、はるまへにるりふしうれ
バふと経てなぐはうふしれるれるて、言うれバ吸ることの
まふあるりにおどろるてれあけるれバ、入おはしるるう方、

きぶるまぞうり也、歩らうかけまくまめりと思つ、銭を
なくあれなるす二つなくて、伊うでかくい濡さ者
野へるぞうらゆれバ、ちられるわが勘者おもしとうび
つるが若しうにうて、銭袋あげて来つるうい、うを
きて、出つるうりとて、挑くまくバをんを面矢はゆ衣をと
ゆて、ぞうをまりて、ぼし付らんとゆゆれバめぐまひつ、
女房はふし野へるぞうるよりまひてかくげうりあそれう
て来りとて、ふかいぐぞうあらめとてかい
けうぐりまふう、神はにしめれまと、男きみこぶり
る銭男ひけうもあそれうて、

けうぐと銭男へ涙さまは袖なうん　よのこまくへバ女房
身をしまの西のしぐ　とみくはくいこうし
ハ身をあるうらバいとかぼうりにうとてぬしまるあ、
あたばけ餅を第はふう、をかしう所もして糸りて
うれいうでとゆゆれバなぐうとて、かうもうげでぞとあく
バそうひをくかうう者うれバが将詐くうんがく
て結くうと思ふて、ぼうきてをうしけきバもうひうそ
けめれいうふやうありとかいくのぐきうとのまくへバあうぐ所万
ぶやいあうせうはあとゆせバ伊のぐひとりあるに八
くふうぐうハとのまくへバゆて三つとうろいとゆ勢者、

かまはれぐあれる女はいくつよりあとへばあとれはけて
ろろうとして笑ふ笑ふあきこ女男のとへど、孤
てきなら表いと実法う三つ嗜て義人はがるもかく
やうしとのさまへばはこそいとうり、板まけれ
ハ病ちよひあ多ちはよ許いとればまきどうかい
うぐはりてかうり、かとハなくやあつうんかく濡ろうを
りくぎ、弟忍びてきれほどのるいて笑ふうばうりはは心
ぢはいそもむりもあらぐいなひゆ右所ろれ
まやとりくぎ、あはとしろしかりれんと、行あるめ、ら、れを
うしと宮しきとハ女ハ行るまなれをろう悔とれ、みみ

ぎくつろはいれでくとも、三千度ばうりそきろとひてゆ
濡しやたくまひてんなどいへもでいのれのがかぐ万に
知りふなどのひて病あまめあやうきろひおちをばきま
しかぎいみぐうはしなどらひて寝め、行ろへちもめ
巻ばいと風明るあ、伴のでかへらんとろ所ほどうあと
犯いやく痛ほくろるうれ、石山ろもけふいうりれけし
めうん人もうろ風と書れと思ふも、静心なくて、ゆく
はを水などれもふろ、いろ犯ありけばあちはさ、ちぶかく
きぐぐろなくはうりよ野ふをいへぎ、伴のぐはほどもも
きとろろう人を居きりられば人やふと来ることはけ

わづあらくそでかゝるとゝらふ車とりてやれ、やとらぬやとゝ、
なんとよろこまつほどゝいし山よりの〳〵ぎりてかくりおゝし
ぬ、用なりとて、ゝらはもそでなりめ、